

母語の漢字知識の転移が日本語習得に及ぼす影響

松永幸子

カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校

要旨

本研究は、母語の漢字知識の転移が日本語習得に及ぼす影響を中上級課程において調査したものである。研究目的は、漢字知識の転移の有効性の有無と、その逆効果の有無を見出すことであった。研究方法として、アメリカの日本語中上級レベルの大学生40名を対象に、会話力テストと読解力テストを実施し、母語の漢字知識がある者(漢字圏)とない者(非漢字圏)の成績を比較した。その結果、前者による漢字知識の転移の有効性が漢字の多いテキストの読解で確認された。しかし母語から漢字知識は転移できても日本語の漢字の読み方を知らない学習者は、読解力はあるが、会話力が他の学習者に比べて劣っている傾向が見られた。又、漢字圏非漢字圏、両グループにおいて、会話力の強い学習者が日本語の漢字の読み方を知っており、読解力も高かった。又、非漢字圏の学習者は、会話力レベルの高い者ほど未習漢字の意味を正確に推測して、読解を深めていた。これらの発見から、真の日本語読解力習得のためには、母語の漢字知識の有無にかかわらず、会話力の発達(未習漢字の意味の推測力の発を伴う)と共に、日本語で漢字が読める能力の発達が必要だと言えるであろう。

キーワード：漢字知識、転移、日本語読解力習得、会話力、読解力

1 はじめに

過去十年間、母語(中国語、韓国語)の漢字知識の転移が日本語習得に及ぼす影響について研究されてきた。例えば、Chikamatsu (1996)、Koda (1989)、Mori (1998) は、初級段階において、学習者の母語の漢字知識は、日本語の単語認識力や長文読解力の習得に有効的に活用されているという研究結果を報告している。又、Hatasa (1992) と Ishida (1986) は、漢字知識の転移の有効性を認めながらも、Hatasa はその有効性に限界がある可能性を示唆し、Ishida は漢字圏の学習者の読解力の弱さを指摘している。従って、過去の研究は、初級段階における漢字知識の転移の有効性を証明してはいるが、同じ有効性が中上級レベルでも存在するのか、むしろ逆効果が現れる可能性もあるのではないか、等の疑問には十分答えてはいないと言える。

2 問題と目的

本研究は、中上級課程での漢字知識の転移(母語の漢字の読み及び意味の知識を当てはめて日本語の漢字の意味を把握しようとする行為)の有効性の有無と、その逆効果の有無を見出すことを目的に行われた。もし漢字知識の転移の有効性が中上級課程においても逆効果なく存在するのであれば、漢字知識の転移は、日本語習得のための有益な戦略として奨励されるべきものであると考えられる。又何らかの逆効果があるのであれば、それを指摘し、漢字知識の転移の是非について再考察する必要があると考える。

従って、本研究では、次の二つの仮説をたてた。

仮説1：母語から漢字知識が転移できる学習者は、転移できない学習者より、中上級段階においても高い読解力を示す。

仮説2：母語から漢字知識が転移できる学習者の中でも、その知識に頼りすぎている者は、日本語の会話力が弱い。すなわち会話力において、転移の逆効果が現れる。

3 研究方法

1) 被験者

被験者は、アメリカ、カリフォルニア州立大学の日本語学習者(中上級レベル)40人(男性20人、女性20人；平均年齢29歳)であり、被験者の母語は英語(22)、中国語(12)、スペイン語(3)、韓国語(2)、タイ語(1)であった。被験者の平均日本語学習年数は、5.26年であった。

2) 方法

実験には、中級用教科書 *Basic Kanji Book, Volume 2* (Kano, Shimizu, Takenaka & Ishii, 1992)から、被験者にとって初見の三つのテキストを引用した。そのうち一つは練習用の「手紙」(p. 29)で、実験用のものは「おばあさんと女の子」(p. 192)と「成田空港」(p. 171)であった。「おばあさんと女の子」(テキストA)は物語体の文章で、「成田空港」(テキストB)は叙述的な文章であった。前者の方が後者より文章は長い。漢字数のテキスト全体の文字数に対する比率は低かった。これらのテキストは三つとも振り仮名、単語表を省いて、実験者がタイプし直し、プリントした。

又、上記のテキストに出てくるすべての単語をリストした単語表、被験者の経歴を書いてもらうための質問書、テキストの内容の難しさ等をスケール(1から4)で示してもらうための質問書をそれぞれ別に用意した。これらの質問書は、実験後被験者に記入してもらった。

実験は実験者のオフィスで一人ずつ行った。まず、単語表を見て、意味が分からない単語をマークしてもらった。次に、日本語でインタビューを行った。インタビューは、挨拶から始まり、日常生活や将来の予定等に関する質問に移った。それから、実験者が準備した一家族の絵と、その絵に描かれた人物を英語で紹介したものを被験者に見てもらい、その家族を自分の家族だと仮定して、日本語で叙述してもらった。インタビューは、テープレコーダーに収録し、実験後、実験者が聞き返した。被験者の会話力は、発音、単語、文法、ナチュラルネス、コミュニケーション、各20点100点満点で採点し、評定した。評価の基準は、*ACTFL Japanese Proficiency Guidelines* (1987) に準拠し、Advancedレベルに20点、それ以下のレベルに18点 (Intermediate-High)、16点 (Intermediate-Mid)、14点 (Intermediate-Low)、12点 (Novice-High) を与えた。

インタビューの後、読みの練習セッションに入った。まず、練習用テキストの内容に関連したトピックについて英語でディスカッションを行った。そして、内容理解を目的に被験者にテキストを黙読してもらい、その時間を計った。黙読後、被験者にはテキストの概要を英語で話してもらった。それから、同じテキストを音読してもらい、日本語で読めない漢字を確認した。音読後、内容理解度を調べるためにテキストの内容を英語に逐語訳させた。テキストのどこ(文節末、文末、又は段落末)まで音読して逐語訳するかは、被験者に任せた。黙読中も音読中も、分からない単語の読み方や意味は、なるべく推測するように指示した。被験者の声はすべてテープレコーダーに収録した。内容理解度は、正しく逐語訳できた文節数のテキスト全体の文節数に対する比率を算出し、評定した。

実験の要領が分かった時点で実験セッションに入った。実験用の二つのテキストを、ディスカッションの後、練習セッションと同じ要領で読んでもらった。二つのテキストは、被験者ごとに読む順番を

入れ変えた。実験時間は各被験者につき約一時間を要した。

実験方法を再度まとめると、下記のようなになる。

- (a) 単語表(実験用テキストに出てくるすべての単語をリストしたもの)を見て、意味が分からない単語をマーク
- (b) 日本語でオーラルインタビュー
- (c) 読みの練習セッション(ディスカッション、黙読、概要、音読、意味)
- (d) 実験セッション(ディスカッション、黙読、概要、音読、意味)
- (e) 質問書(被験者の経歴に関するものと、テキストの内容の難しさを示すためのスケール表)の書き込み

4 結果と考察

1) 結果

まず、一人の被験者を、英語力の不足を理由にデータ分析から除外した。そして残りの39人を漢字グループ(11人)と非漢字グループ(28人)に分けた。漢字グループは全員中国語を母語とする被験者で、母語から漢字知識が転移できるグループである。この二つのグループの会話力、内容理解度、読む速度(秒)の平均値と偏差値は表1に示すとおりである。

表1: 漢字グループと非漢字グループの会話力と読解力(内容理解度と読む速度)の比較

グループ バリエーション	漢字 (n = 11)	非漢字 (n = 28)
会話力 M SD	77.09 15.42	84.71 12.94
[テキストA] 内容理解度 M SD 読む速度(秒) M SD	89.01 6.19 234 169.31	79.10 11.33 333 191.27
[テキストB] 内容理解度 M SD 読む速度(秒) M SD	85.47 11.33 129 59.79	61.04 21.21 258 129.14

データ分析にはMANOVAとANOVAを使用した。MANOVAによると、両テキストにおいてグループの有意差が認められた。テキストAでは[Pillai's $V = .462, F(3, 35) = 10.021, p < .001$]であり、テキストBでは[Pillai's $V = .648, F(3, 35) = 21.447, p < .001$]であった。ANOVAによると、会話力ではグループの有意差が認められなかった。又、テキストAでは読解におけるグループの有意差が出なかったが、

テキストBにおいて、内容理解度 [$F(1, 37)=10.027, p < .01$]と読む速度 [$F(1, 37)=27.674, p < .0001$]で認められた。この結果は、漢字グループが非漢字グループよりテキストBの内容を速く、正確に理解していたことを示している。すなわち、内容理解度で出た有意差は、漢字グループと非漢字グループの漢字知識の差を表わしており、又、実験後の質問書上で被験者が感じたと言ったテキストBの内容の難しさ(2.364 [漢] vs. 3.571 [非])におけるグループの差 [$F(1, 37)=27.674, p < .0001$]をも裏付けている。やはり非漢字グループは、自分が難しいと感じたテキストの内容理解に苦しんだようである。

上記の結果を見る限り、母語での漢字知識は、漢字グループにとって、何の逆効果もなく、有効的に転移されているように思われる。だが、漢字グループの中でも漢字知識を母語から転移する必要があった者となかった者がいるのではないだろうか。このことを考慮して、今度は、同じ39人の被験者を次の三つのグループに分けてみた。一つは、漢語（本研究では漢字で表記しうる単語及び熟語とする）の日本語の発音がわかるため、漢字知識を母語から転移する必要がなかったグループ(M+P+)、一つは、漢語の日本語の発音がわからないため、漢字知識を母語から転移する必要があったグループ(M+P-)、もう一つは、母語が漢字を使わないため、漢字知識を母語から転移したくてもできなかったグループ(M-P-)である。M+ というのは、各テキストの中の漢語の意味が90%以上理解できた者を意味し、P+ というのは、各テキストの中の漢語の日本語の読み方を90%以上知っていた者を意味する。従って、このグループ分けによると、テキストAにおいて12人がM+P+、7人がM+P-、7人がM+P-、20人がM-P-に属する。又、テキストBでは6人がM+P+、7人がM+P-、26人がM-P-に属する。この三つのグループの会話力、内容理解度、読む速度の平均値と偏差値は表2に示すとおりである。

表2: 母国語から漢字知識を転移する必要のなかった者(M+P+)とあった者(M+P-)と転移したくてもできなかった者(M-P-)の会話力と読解力(内容理解度と読む速度)の比較

グループ バリエーション	M+P+	M+P-	M-P-
[テキストA]	(n = 12)	(n = 7)	(n = 20)
会話力			
M	94.0	70.5	82.0
SD	5.12	15.99	10.64
内容理解度			
M	94.4	86.3	73.7
SD	5.48	3.54	15.83
読む速度(秒)			
M	151	291	369
SD	76.98	192.23	154.04
[テキストB]	(n = 6)	(n = 7)	(n = 26)
会話力			
M	91.6	70.5	83.6
SD	5.57	15.99	12.86
内容理解度			
M	91.9	82.7	58.4
SD	8.65	11.84	19.59
読む速度(秒)			
M	91.8	145	272
SD	24.18	70.22	122.38

まずMANOVAによると、グループの有意差が両テキストにおいて認められた。テキストAでは [Pillai's $V = .908, F(6, 70) = 9.705, p < .001$] であり、テキストBでは [Pillai's $V = .871, F(6, 70) = 9.002, p < .001$]であった。又、ANOVAと Scheffé's post hoc comparisons では、次のような結果が出た。テキストAでは、会話力においてM+P+がM+P- ($p < .001$)とM-P- ($p < .01$)より成績がよく、内容理解度はM+P+, M+P-共にM-P-より高く ($p < .05$)、読む速度はM+P+だけがM-P-より速かった ($p < .001$)。テキストBでは、会話力においてM+P+とM-P-に有意差が見られ ($p < .05$)、内容理解度はM+P+, M+P-共にM-P-より高く ($p < .05$)、読む速度もM+P+ ($p < .01$)とM+P- ($p < .05$)がM-P-より速かった。ここから、すべてのパラメータにおけるM+P+の強さがうかがえる。又、M+P-がテキストAで読む速度を落としていることも面白い結果である。

では次に、会話力、読解力（内容理解度、読む速度）、漢字の解読力（日本語の読み方を知らなくても意味が分かる漢語の数）との相関関係を、元の漢字グループと非漢字グループに分けて調べてみよう。結果は、表3（漢字グループ）と表4（非漢字グループ）に示すとおりである。

まず漢字グループ(表3)について言うと、テキストAにおいて、会話力は、読む速度 ($r = -.635, p < .05$)と漢字の解読力 ($r = -.973, p < .0001$)との間に強い相関関係が認められた。テキストBでは、会話力は、読む速度 ($r = -.801, p < .01$)、内容理解度 ($r = .718, p < .05$)、漢字の解読力 ($r = -.934, p < .0001$)との間にそれぞれ強い相関関係が認められ、又、漢字の解読力は、読む速度 ($r = .782, p < .01$)とも強い相関関係が見られた。即ち、両テキストにおいて、会話力レベルの高い学習者ほど日本語の漢字の読み方を知っており、読む速度も速かったこと、そしてテキストBの内容理解度も高かったことがわかる。又、テキストAにおいて漢字の解読力と読む速度の相関関係が弱いのは、このテキストは漢字数の比率が低いために、漢字に無関係の語彙 (e.g., カタカナ表記語)、文法、又は談話レベルでのプロセスに時間を要したせいであろう。

表3: 漢字グループにおける会話力と読解力（内容理解度と読む速度）と漢字の解読力の相関関係

	1 会話力	2 読む速度	3 内容理解度	4 漢字の解読力
テキストA (n = 11)				
1. 会話力	----	-.635*	.504	-.973****
2. 読む速度		----	-.357	.543
3. 内容理解度			----	-.595
4. 漢字の解読力				----
テキストB (n = 11)				
1. 会話力	----	-.801**	.718*	-.934****
2. 読む速度		----	-.491	.782**
3. 内容理解度			----	-.590
4. 漢字の解読力				----

* $p < .05$. ** $p < .01$. *** $p < .001$. **** $p < .0001$.

表4: 非漢字グループにおける会話力と読解力（内容理解度と読む速度）と漢字の読解力の相関関係

	1 会話力	2 読む速度	3 内容理解度	4 漢字の読解力
テキストA (n = 28)				
1. 会話力	----	-.866****	.828****	-.581**
2. 読む速度		----	-.795****	.561**
3. 内容理解度			----	-.743****
4. 漢字の読解力				----
テキストB (n = 28)				
1. 会話力	----	-.771****	.717****	-.504**
2. 読む速度		----	-.542**	.417*
3. 内容理解度			----	-.426*
4. 漢字の読解力				----

* $p < .05$. ** $p < .01$. *** $p < .001$. **** $p < .0001$.

次に非漢字グループ(表4)のデータであるが、テキストAでもBでも、会話力は、読む速度 ($r = -.866, p < .0001$ [A]; $r = -.711, p < .0001$ [B])、内容理解度 ($r = .828, p < .0001$ [A]; $r = .717, p < .0001$ [B])、漢字の読解力 ($r = -.581, p < .01$ [A]; $r = -.504, p < .01$ [B]) との間にそれぞれ強い相関関係が認められた。この結果は、両テキストにおいて、会話力レベルの高い者が日本語の漢字の読み方を知っており、速く正確に内容が理解できたことを表わす。又、漢字の読解力は、読む速度 ($r = .561, p < .01$ [A]; $r = .417, p < .05$ [B]) と内容理解度 ($r = -.743, p < .0001$ [A]; $r = -.426, p < .05$ [B]) との間に強い相関関係が見られた。やはり会話力が弱く、日本語の漢字の読み方を知らなければ、非漢字グループにとって、どちらのテキストも効果的に読むのは難しいようである。

最後に、被験者の知らなかった漢語（実験前、単語表にマークされた漢語）の意味の推測力のデータを分析する。まず、各テキストの中で知らない漢語の意味が10%以上なかった被験者、すなわち、意味を推測する必要がほとんどなかった被験者（漢字グループ全員と非漢字グループ数人）を分析から除外した。そして、残りの被験者（テキストAでは19人；テキストBでは26人）が実験中、文脈から意味を推測できた漢語のパーセンテージ(MG%)を計算して、会話力、読む速度、内容理解度との相関関係を調べた。その結果は表5に示すとおりである。

両テキストにおいて、MG%は、会話力 ($r = .717, p < .01$ [A]; $r = .523, p < .01$ [B]) と内容理解度 ($r = .656, p < .01$ [A]; $r = .824, p < .0001$ [B]) との間に強い相関関係が認められた。この結果から、会話力が強い被験者ほど、知らなかった漢語の意味を文脈から推測しており、そうすることによって内容理解を深めていることが分かる。又テキストAにおいて、MG%と読む速度 ($r = -.620, p < .01$) との間にも強い相関関係があったことから、被験者が内容が易しいと感じたテキストの場合は、会話力があり未習漢語の意味の推測力がある被験者は、内容理解度が高いだけでなく、読む速度も速く、効果的な読み方をしていると言える。

2) 考察

本研究の目的は、中上級課程における漢字知識の転移の有効性の有無と、その逆効果の有無を見い

表5: 未習漢字の意味の推測力 (MG%) と会話力と読解力[内容理解度と読む速度]の相関関係

	1 会話力	2 読む速度	3 内容理解度	4 MG%
テキストA (n = 19)				
1. 会話力	----	-.782****	.721***	.717**
2. 読む速度		----	-.675**	-.620**
3. 内容理解度			----	.656**
4. MG%				----
テキストB (n = 26)				
1. 会話力	----	-.656***	.665***	.523**
2. 読む速度		----	-.37	-.304
3. 内容理解度			----	.824****
4. MG%				----

*p < .05. **p < .01. ***p < .001. ****p < .0001.

出すことであった。研究方法として、外国語としての日本語学習者40名(中上級レベル)を対象に、会話力テストと読解力テスト(黙読及び音読)を実施し、データを二つの仮説をたてて分析した。(仮説1: 母語から漢字知識を転移できる学習者は、転移できない学習者より、中上級段階においても高い読解力を示す; 仮説2: 母語から漢字知識が転移できる学習者の中でも、その知識に頼りすぎている者は、日本語の会話力が弱い。すなわち会話力において、転移の逆効果が現れる。)

まず、母語の漢字知識がある者となない者の成績を比較した結果(表1)、仮説1が支持された。漢字グループが持つ母語の漢字知識は、少なくとも、漢字数の比率の高いテキストの読解において有効的に転移されていた。仮説2はどうであろう。表2を見ると、漢字グループでも、日本語の漢字の読み方を知らない学習者(M+P-)は知っている学習者(M+P+)(非漢字グループの学習者も一部含む)より会話力が弱く、又、漢字数の比率が低いテキストAでは、読む速度を落としていた。これはテキストAの漢字数の比率が低いため、内容理解を助ける漢字にあまり頼れなかったからではないだろうか。即ち、漢字数の比率の低いテキストの内容を理解するためには、漢字に無関係の日本語の言語能力(語彙、文法、談話レベルでの能力)が必要になるが、漢字知識の転移に頼っている学習者(M+P-)はその言語能力(本研究では会話力として測られた能力)が弱いため、このようなテキストはスムーズに読めず、スピードが落ちてしまったのではないだろうか。もちろん、ここで言語能力を会話力と同一のものとするには危険性がある。しかし実際、読解が効果的に行われるためには、書き言葉の音韻処理及び意味処理を伴う口頭のプロセス(verbal processing)が能率的に行われなければならないという説があり(Perfetti, 1996)、それを支持する研究報告も多い(e.g. Perfetti & Lesgold, 1979; Perfetti, 1985)。この説を考慮すると、M+P-の会話力不足は、母語の漢字知識の転移に頼る傾向(ゆえに日本語で読めない漢語が会話の中で使用できない傾向)と少なくとも何らかの関係があり、漢字の比率の低いテキストが効果的に読めないという結果が出たと言えるのではないだろうか。もちろんこの解釈はあくまでも仮定的なものにすぎない。従って、M+P-の会話力不足が母語の漢字知識の転移が及ぼす逆効果の現れであるかどうか、つまり仮説2が支持されたかどうかは、将来の研究によって明らかにされるべきである。

最後に、表3、表4、表5の結果を考察する。まず表3だが、これは漢字グループの中でも会話力レベルの高い学習者が日本語の漢字の読み方を知っており、高い読解力をもっていること、又、読解力と漢字の読解力というものが同じではないこと（相関関係の欠如）を示している。即ち、母語から漢字知識が転移できる学習者でも、会話力、そして日本語の漢字の読み方の知識がなければ真の読解力があるとは言えないことを意味する。これは、表4が示すように、非漢字グループについても言えることで、やはり会話力が弱く、日本語の漢字の読み方を知らなければ、どちらのテキストでも内容を十分に理解しながらスムーズに読むのは難しいことなのである。又、非漢字グループの未習漢字の意味の推測力と会話力に強い相関関係があり、さらには読解力との間にも強い相関関係があった(表5)ことから、会話力が強い被験者ほど、テキスト中の未習漢字の意味を文脈から推測しており、そうすることによって、内容理解を深めていることが分かる。

以上、上記の考察を再度まとめると、母語の漢字知識の転移は、中上級レベルの日本語学習者の読解に役立つにはいるが、日本語の漢字の読み方を知らない学習者 (M+P-)は、会話力が弱く、真の日本語読解力（漢字数の比率にかかわらず、テキストの内容が速く正確に読める力）があるとは言い難いようである。つまり、真の日本語読解力の習得、即ち表2のM+P+に見られたような読解力の習得のためには母語の漢字知識の有無にかかわらず、会話力の発達（未習漢字の意味の推測力の発達を伴う）と共に、日本語で漢字が読める能力の発達が必要だと言えるのではないだろうか。もちろん、この結論は今後の研究によって確認する必要があるが、本研究が、漢字知識の転移の是非についての再考察に役立ち、日本語教育界への一つの貢献になってくれれば幸いである。

引用文献

- ACTFL Japanese Proficiency Guidelines. (1987) *Foreign Language Annals* 20: 589-603.
- Chikamatsu, N. (1996) "The effects of L1 orthography on L2 word recognition: A study of American and Chinese Learners of Japanese." *Studies in Second Language Acquisition* 18: 403-432.
- Hatasa, Y. A. (1992) *Transfer of the knowledge of Chinese characters to Japanese*. Ph.D. diss., University of Illinois, Urbana-Champaign.
- Ishida, T. (1986) "Eigo, chūgokugo, kankokugo-ken betsu Nihongo gakuryoku no bunseki" [The analysis of the Japanese language proficiency of English, Chinese and Korean students]. *Nihongo kyōiku* 2: 162-194.
- Kano, C., Y. Shimizu, H. Takenaka and E. Ishii (1992) *Basic kanji book* (3rd ed., Vol. 2). Tokyo: Bonjinsha.
- Koda, K. (1989) "The effects of transferred vocabulary knowledge on the development of L2 reading proficiency." *Foreign Language Annals* 22: 529-540.
- Mori, Y. (1998) "Effects of first language and phonological accessibility on kanji recognition." *The Modern Language Journal* 82: 69-82.
- Perfetti, C. A. (1985) *Reading ability*. New York: Oxford University Press.
- Perfetti, C. A. (1996) "Automaticity and language." In S. T. Hayes and E. Takahashi (Eds.), *Proceedings of the Eighth Annual Conference of the Lake Erie Teachers of Japanese* (pp. 3-18). Pittsburgh, PA: The Lake Erie Teachers of Japanese.

Perfetti, C. A. and A. M. Lesgold (1979) "Coding and comprehension in skilled reading and implications for reading instruction." In L. B. Resnick and P. A. Weaver (Eds.), *Theory and practice in early reading* (Vol. 1) (pp. 57-84). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

**Kanji Knowledge Transfer:
Its Effects on Acquisition of Japanese as a Foreign Language**

**Sachiko Matsunaga
California State University, Los Angeles**

Summary

Over the past ten years, several studies have documented the transfer of kanji (Chinese characters) knowledge, and reported its positive effects on the initial development of reading skills in Japanese as a foreign language. More specifically, these studies indicated that, at least initially, those who have learned kanji in their first languages outperform those who have not, by transferring that knowledge to Japanese word recognition and reading comprehension. However, whether these positive effects continue to exist at later stages is not clear. Moreover, whether such transfer could have negative effects should also be investigated.

The purpose of this paper is therefore to clarify these two issues, by examining the oral performance and the reading performance of 40 intermediate and advanced nonnative readers of Japanese with and without kanji background. The data from this study indicated that those with a kanji background do have advantage in reading Japanese texts which contain many kanji, but those who rely heavily on kanji knowledge transfer (i.e., kanji decoders in their native language) do so at the cost of their oral proficiency. Furthermore, in both groups, those who had high oral skills knew the Japanese pronunciation of kanji words, and had higher comprehension. Moreover, a high correlation was found between the oral skills of the participants without kanji background and their guessing skills regarding the meanings of unknown kanji words, suggesting that the oral skills contribute greatly to successful guessing of the meanings of unknown kanji words, and in turn to successful comprehension. Thus, it seems reasonable to argue that regardless of the learners' kanji background, for the full development of Japanese reading skills, it is crucial to develop solid oral proficiency (along with guessing skills of the meanings of unknown kanji words), and to acquire the ability to assign Japanese sounds to kanji words.